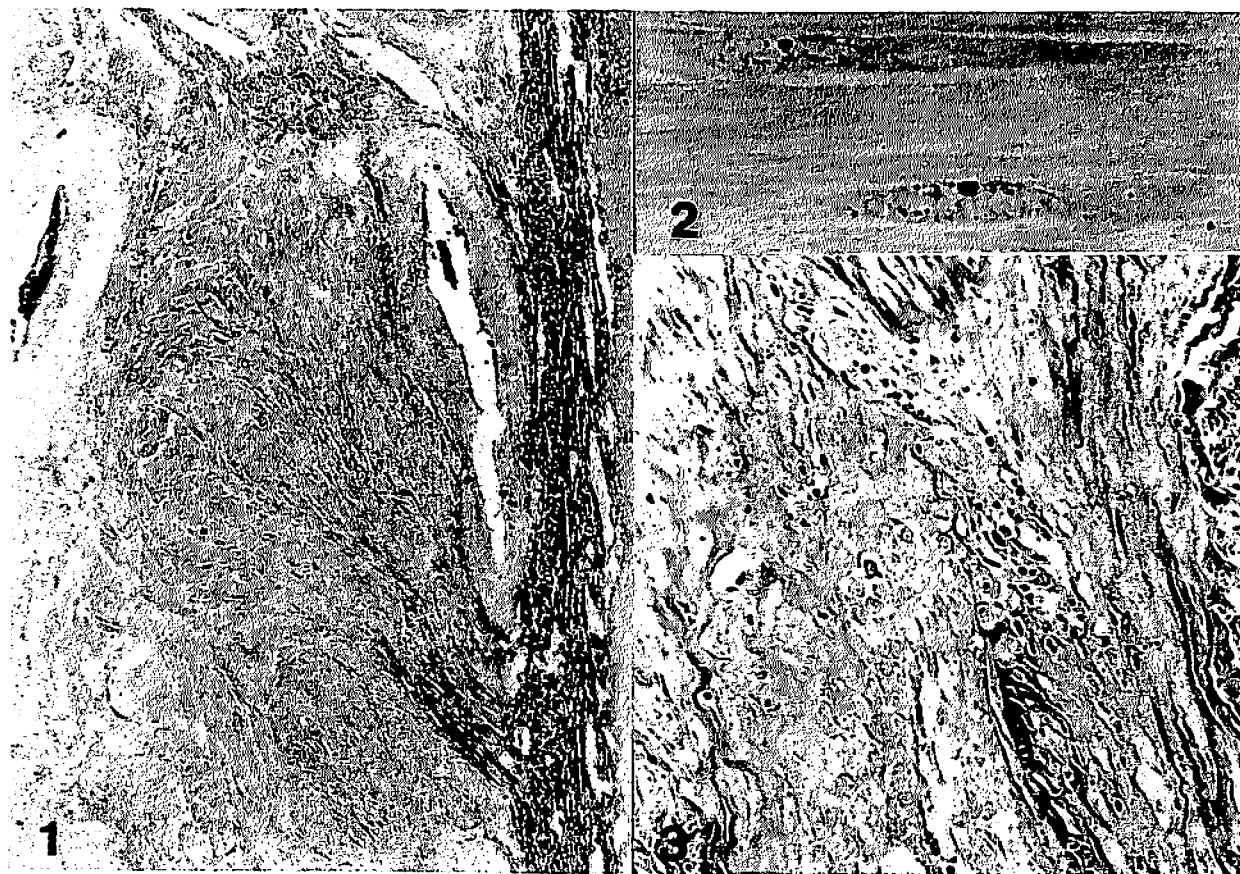


豚の耳甲介の腫瘤

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題 第25回獣医病理学研修会標本No.425



動物：豚・ラージホワイト，1才(1981年11月生)，♀。

臨床的事項：1982.12.13 品評会に出した折，右側耳甲介の耳標穴縁に小豆大血餅様物を認めた。同12.2 初産8頭を正常分娩。同12.22 初診，稟告は「耳におでき(腫瘤)ができ，日増しに大きくなり，時に出血，最近は悪臭を放つ。時に食欲減退気味」とのこと。同12.25 腫瘤は外科的に切除された。

肉眼所見：腫瘤は2.1kg，ほぼ球状で径17cmにおよび，硬くわずかに弾力を有していた。耳甲介を含む部分はいくびれ，陥凹していた。表面は痂皮状の茶褐色汚穢物が覆い，被毛はほとんど存在しなかった。剖面は灰白色線維状の束が縦横に交錯し，中心部領域の一部には静脈拡張を思わせる叢状構造がみられ，血液を容れていた。耳甲介は折れ曲った形で表面より腫瘤の中心部に向い，約 $\frac{1}{4}$ まで達し，腫瘤内に埋没していた。

組織所見：腫瘤の主要所見は縦横に交錯する束状の線維よりなり，その線維のほとんどは膠原線維で占められ，弱拡大像ではあたかも線維腫の様相を呈する腫瘍性組織であった(写真1，アザン染色，弱拡大)。しかし，強拡大像では膠原線維の間に長紡錘形で中央部が太く，両端が細くみえる線維性細胞が散在性に認められた。その細胞質はエラスチカワンギーソン染色でピクリン酸染色性，

トリクローム染色で弱紫桃色の色調を示していた。核は細長杆状で，核の両端は鈍て所謂cigar shaped or blunt ended nucleusの様相を呈し，この線維性細胞は平滑筋細胞と確認された(写真2，トリクローム染色，強拡大)。

一方，腫瘤内の血管は耳甲介軟骨周辺に分布する血管を除き，管壁の弾性線維はほとんど認められず，外膜の存在も不明瞭であった(写真3，アザン染色，中拡大)。

また，中膜の平滑筋細胞は幼若型のものが多く，一部には核分裂像がみられ，平滑筋細胞の走行・配列の不整が目立っていた。このような細胞よりなる中膜筋層は境界不明瞭のまま直接腫瘍性変化を示す組織(写真1)へと移行しているようにみえた。

以上のように本腫瘤は膠原線維の優勢な基質を持つ平滑筋腫であり，その組織学的特徴から線維平滑筋腫とみなされた。元来，平滑筋腫は生殖器，消化器に多くみられ，皮膚での発症は少ないとされている。また，皮膚発生の平滑筋腫は多発性と単発性とがあり，本症例のような単発性の平滑筋腫は立毛筋由来あるいは血管平滑筋由来が考えられている。

病理組織学的診断：豚の耳甲介皮膚に発生した血管平滑筋由来の線維平滑筋腫。